

覚如・存覚を支えた門弟達

——初期本願寺教団の生成——

龍 口 恭 子

はじめに

覚如が二度に亘って存覚を義絶したことは、初期真宗教団における重大事であったが、親鸞が善鸞を義絶したことと異なるのは、覚如と存覚は最終的には和解して互いの志を確認できたことである。義絶の理由については諸説あるが、二人の間にはいづれの理由も克服できるだけの共通の目的と強い連帯意識があったのである。

覚如・存覚が、親鸞の子孫が統率者となって教団を率いるいわゆる本願寺教団の確立を目的としたことは明らかであるが、この目的の達成のためになされたのは、まず親鸞を中心とする歴史の叙述、具体的には伝記の制作、次いで真宗教義の周知、そのための要論の執筆、さらには各地の門徒達の糾合等々。結果的にこの一門の手になる多くの著作が遺されたのであり、それらはいわゆる「聖教」としてその伝承と解釈がその後の本願寺教団の課題となったのである。著作は覚如・

存覚の卓越した文筆の才のなせるものであったが、それを支えた門弟達の助力と力量を見落とすことはできない。本論では、覚如・存覚の著作に協力した寂靜・永承・乗専・了源・従覚を取り上げ、彼等の経歴・事跡・教団への寄与等について考察してみたい。

一 覚如・存覚の地方歴訪

覚如・存覚は京都の大谷の地を本拠として教化活動を続けたが、覚如の父覚恵の代から継続された東国を初めとする各地の歴訪によって教団内での教化、支持者との交流をはかる等、二人の生涯は旅と共にあったと言つて過言ではない。『存覚一期記』『慕帰絵詞』『最須敬重絵詞』により、二人が訪れた時と所をあげてみたい。

(一) 覚如

正応三年(一二九〇)一一歳。三月、覚如、父覚恵に従つて、東国巡見。相州、余綾山中で慈信坊(善鸞)・如信が

入来し面謁する。二年後帰洛し、大谷に居住。

乾元元年（一三〇二）三三歳。 覚如、勧進をする覚恵の使い

で東国に下向。

徳治二年（一三〇七）三八歳。 覚如、三河に下向。和田道場

伝来の親鸞自筆『上宮太子御記』を书写。奥州野辺の了

専・了意父子と共に奥州に赴く。

延慶三年（一三一〇）四一歳。 一月、覚如、存覚に作らせた

勧進状を用意し関東へ下向。影堂相統のことを、岩代の

安積門徒、常陸の鹿島門徒の了承を得て、覚如は従来通

り大谷に住す。

応長元年（一三二一）四二歳。 覚如、存覚と共に越前に下向。

大町如道の許に滞在。存覚が覚如の命で如道に『教行信

証』を講義。伊勢に赴く。冬頃、奥州へ下向。この年、

親鸞五十回忌。

正和元年（一三二二）四三歳。 覚如、如信の十三回忌に金沢

の道場や大綱に参り仏事を修する。

正和三年（一三二四）四五歳。 春頃、覚如、存覚と共に、尾

張に下向。

文保元年（一三一七）四八歳。 八月下旬、覚如、存覚夫妻と

ともに、天王寺へ参詣。

元応元年（一三一九）五〇歳。 五月、覚如・存覚、三河から

信濃を経て、飯田の寂円のもとへ行く。

嘉暦元年（一三二六）五七歳。 九月五日、覚如、『執持鈔』

を著す。

正慶元年（一三三二）六三歳。 前年、覚如、如信三十三回忌

を勤修するため、東国へ下向、経廻。主な門徒二十余人

に署名を求めらる。

建武三年（一三三六）六七歳。 夏頃、撰津（溝杭辺）へ下向。

戦火を避けるため、近江瓜生津で越年。翌年、春頃、近

江より帰洛。

暦応元年（一三三八）六九歳。 一〇月頃、覚如・存覚、鎌倉

常葉へ親鸞御影を迎えに向かったが、途中尾張より引き

返す。

(二) 存覚

元亨二年（一三二二）三三歳。 存覚、覚如より勘気を蒙り六

月二五日に大谷を去り、近江瓜生津の愚咄の許に行く。

その後奥州に下向。翌年三月末、存覚、近江瓜生津に到

着。五月に了源の建立による山科の寺に入る。

元弘元年（一三三一）四二歳。 存覚、一月二二日、仏光寺炎

上のため、関東に出発。近江瓜生津に奈有・光女・光徳

丸を預け、存覚は单身関東に向かう。二月一日鎌倉の

願念の許に到着。

正慶元年（一三三二）四三歳。 存覚、鎌倉大倉谷に移住。翌

年、鎌倉を出て、近江瓜生津の仏光寺に向かう。

覚如・存覚を支えた門弟達（龍 口）

覚如・存覚を支えた門弟達（龍口）

建武四年（一一三三七）四八歳。存覚、備後にて『顕名鈔』を著す。

建武五年（一一三三八）四九歳。存覚、備後国府で法華宗と対論。『決智鈔』他を著す。

康永三年（一一三四四）五五歳。二月、存覚、大和へ下向し、居住。十二月頃上洛し、六条大宮に居住。

貞和二年（一一三四六）五七歳。存覚、教願の申し入れにより大和に滞在。

観応元年（一一三五〇）六一歳。存覚、十一月二十九日、河内大枝へ下向。

延文六年（一一三六二）七二歳。三月二日、当時江州木部錦織寺に居た存覚のもとへ大和から三人の門徒訪れる。

存覚の辞世の歌とされる「いまははや一夜の夢となりけり往来あまたのかりのやどやど」に象徴されるような覚如・存覚の生涯であり、二人の旅は本願寺教団を作り上げて行く上で重要な意味を持っていたと言えよう。

二 文官の家

覚如が親鸞の教えの弘布にあたって、父覚恵から受け継いだ教団を発展させるために最も力を注いだのは、聖教の著作、及び門弟にその内容を理解させることであつたと考えられる。覚如は親鸞の三十三回忌にあたり、宗祖親鸞の徳を偲

び『報恩講式』を著し、続いて翌永仁三年（一一九五）に『親鸞伝絵』を著した。これによって祖師親鸞は明確な崇拜の対象となり、親鸞の血筋を尊ぶ浄土真宗本願寺教団の方向性が定まったといつてよい。

覚如は『親鸞伝絵』の冒頭に、親鸞の出自を述べて、

夫聖人の俗姓は、藤原氏、天児屋根尊あまつこやねのみこと二十一世の苗裔大織冠の玄孫、近衛大将右大臣従一位内膳公、六代の後胤、彌宰相有国卿五代の孫、皇太后宮大進有範の子なり。

『御伝鈔』（真聖全 三 六三九頁）

と讃える。一体、僧侶の伝記いわゆる僧伝で、その祖先が神（天児屋根尊）と言った者があつたであろうか。しかし出自が藤原氏の一支流「日野氏」であることは覚如にとっては最要の事であつた。日野氏については、覚如の二男従覚の『慕婦絵詞』に文官としての日野氏についてより詳しく言及する。

倩つらと 往時を思に、宗光朝臣は白河・鳥羽院等の聖代に仕へり、宗業卿は後鳥羽・土御門の明時につかへて、各文道拔群のほまれをほどこし、儒門絶倫の名を揚て、後鳥羽院には四儒随一たりしかば、上古より当時に至までも、道にふけり、学をたしなむ家と云事を褒美讃嘆せぬはなかりけり。『慕婦絵詞』（真聖全 三 七七三頁）

覚如の前記『親鸞伝絵』にも、親鸞が在俗であれば「朝廷に仕へて霜雪をも戴き、射山にわしりて榮華をもひらくべかりし人なれども」（六三九頁）として、天皇の侍読等を輩出し

た日野家に対する強いこだわりが如実に示されている。

このような意識は親鸞には見られないものである。が、親鸞の娘覚信尼は、ふたいとこの日野広綱と結婚し、父以来の日野氏との結び付きを強め、爾来、覚信尼の長男覚恵は日野家光の猶子となり、その長男覚如、さらに存覚も日野俊光を猶父とし、存覚の次男光助は日野家の子弟が多く入寺する今熊野の智蓮光院に入っている。

修学の仕方、宗祖親鸞は日野家の慣例に従い幼少の頃から厳しい漢文の教育を受けたのであるが、⁽¹⁾覚恵以後も、いわゆる宗学である親鸞の教義を学ぶ前提として漢文を学び、仏教全般を修得することが伝統としてあったようである。覚恵は日野光国に導かれ青蓮院尊助の門に入り密教を修し、覚如は澄海より内外典を伝授された。このようにこの一門では日野家の存在が教団を形成する上でも大きな意味を持ったと言えよう。

三 覚如・存覚を支えた門弟達

以上のように覚如は教団生成を意図して、まずは宗祖親鸞の伝記作成、続いて親鸞が師法然の弟子中でいかなる立場にあったかを明らかにする法然伝『拾遺古徳伝』の作成が長井導信の勧めによってなされた。法然を始祖とする諸流が割拠している当時の状況を考えれば、親鸞の位置の確定は是非と

も必要なことであつた。また宗義の周知のために多くの書が門下の者に書き与えられた。与えられた門弟達はそれに対して師への惜しみない援助をして師を支えると共に、その書を帯して宗義の弘布に努めた。

覚如の著述は『執持鈔』『口伝鈔』『本願鈔』『改邪鈔』『願願鈔』『最要鈔』等があり、存覚のものとしては『浄土真要鈔』『諸神本懐集』『持名鈔』『破邪顯正抄』『女人往生聞書』『弁述名体鈔』『顯名鈔』『決智鈔』『法華問答』『報恩記』『至道鈔』『選択註解鈔』『歩船鈔』『存覚法語』等があり、門弟達はこれらの書を読み理解する能力があつたことは言うまでもないが、その教えを体得し自ら述作を為し、師を顕彰した。主な人を次にあげたい。

(一) 寂靜

岡崎市妙源寺藏『親鸞上人門弟等交名』によると高田門徒の系統をひく三河国和田門徒に属する人である。和田門徒においては太子信仰が盛んであり、⁽²⁾徳治二年(一一三〇七)に覚如が三河に下向し、和田道場伝来の親鸞自筆の『上宮太子御記』を書写しているが、寂靜も嘉暦元年(一一三二六)に四天王寺に参詣し、『聖徳太子伝暦』を書写した。真宗教団で勸信のため太子信仰を鼓吹したのである。建武三年(一一三三六)覚如が近江に戦禍を避けている時に大谷影堂が戦火で焼けたが、寂靜は高田の専空らと共に修復し、覚如を助成する等した。

覚如・存覚を支えた門弟達（龍口）

（二）永承（覚淳）

願智坊永承には著作はないが、嘉暦元年（一三二六）覚如に『執持鈔』を与えられたことは、永承のみならず覚如にとつても転機となったと考えられる。それまで伝記類の制作のみであつた覚如が、親鸞の信心の精髓を示す書を著したからである。その後覚如は『口伝鈔』他、数々の著作をなした。永承は覚淳の名を授けられ、美濃から飛驒に移つて念仏を弘めた。覚淳は飛驒吉田に聞名寺を開き、この地で没したが、百年後にはこの寺は山を越え、越中富山の地に教線を拡げる。覚淳は美濃各務原の出身と伝えるが、在住した岐阜にはその後も信心の伝統が守られ現在まで続いていることを考えると、覚如・覚淳の影響の大きさが推し量れるのである。

（三）乗専

丹波の人。清範法眼と名乗り、「三宗のうち教外別伝の宗門に入り、かねては『法華』読誦の懇露を凝しめけり。その性岐嶷にして一代仏教の腑蔵を搜識ばやと心につけ、無量内外の典籍を博覧せんと志をはこび」（『慕婦絵詞』（八〇九頁）弁と筆に長けた僧侶であつた。覚如に帰依して以後、よく浄土真宗の弘布に努め、「乗専法師の写伝した聖教類は、現存の分と他の記録で知り得た分とを合せて二十七部ばかり、その年代は元弘二年、三十八歳から文和元年五十八歳まで二十一年間に互るのである。」⁽⁴⁾との指摘があるが、謹厳な字体で聖教類の

多くの書写本が遺されている。また流麗な文体で『最須敬重絵詞』を著したが、これは『慕婦絵詞』と同様覚如の伝記であり、初期本願寺派の実情を伝える貴重な史料と言える。

（四）了源（空性）

元応元年（一三一九）八月、『勸進帳』を制作。元応二年（一三三〇）初めて大谷本願寺に帰参。俗名弥三郎、比留左右衛門維広所属の中間であり、麻布門徒明光の門人であつた。覚如の元を訪ねたが存覚が指導することになり、以後存覚に近侍した。存覚は『女人往生聞書』以下、「数十帖の聖教を、あるいは新草し、あるいは書写して」⁽⁵⁾与えた。元応二年（一三三〇）一月に既に仏師湛空に聖徳太子の尊像を作らせ、二八日先師阿佐布の了海の遺骨を太子像の頭中に込め、開眼供養を行なつていた。この像の胎内文書を認めた円空（乗専）の仲介で覚如・存覚のもとにやつて来たとの説がある。⁽⁶⁾存覚の一家を庇護しつつ了源は仏光寺派を確立したが、伊勢路で賊に襲われ亡くなつたと伝える。

（五）従覚

覚如の次男。兄存覚と共に父の本願寺第三世覚如を補佐し、長男である本願寺第四世善如を後見した。正慶二年（一三三三）親鸞の書翰を集め、『末灯鈔』を編纂した。観応二年（一三五二）、覚如亡き後、その生涯を綴り、当代の書家、画家の助力を得て、『慕婦絵詞』を制作した。古来、絵巻物の傑作とされる。

むすび

以上、初期本願寺教団において、覚如・存覚を中心に教団の生成に携わった人々の事跡を辿ってみた。覚如・存覚の意志に沿い、協力を惜しまなかったこれらの門弟達は、それぞれ著作を心得ていたと考えられ、他派から転宗した者も、二人に帰依した後は、その実力をよく発揮し宗門の発展に寄与したのである。

- 1 今井雅晴『親鸞と東国』（吉川弘文館、二〇一三、一七頁）。
- 2 村松加奈子「聖徳太子絵伝の制作拠点に関する一考察——天王寺と法隆寺を中心に——」（『文化創造の図像学』（アジア遊学一五四、勉誠出版、二〇一二、三二頁）。
- 3 覚如・覚淳の信心を伝える寺として、岐阜市の船橋願誓寺・円徳寺、吉城郡吉田の常蓮寺、富山県八尾聞名寺等が知られる。
- 4 禿氏祐祥「乗専法師と仮名聖教の写伝」（『宗学院論輯』第二〇号、一九七六、一一二二頁）。
- 5 重松明久『覚如』（吉川弘文館、一九六四、一八六頁）。
- 6 小山正文『親鸞と真宗絵伝』（法蔵館、二〇〇〇、四八〇頁）。

〈参考文献〉

- 重松明久『覚如』（吉川弘文館、一九六四）
 今井雅晴『親鸞と東国』（吉川弘文館、二〇一三）
 林智康編『存覚教学の研究』（永田文昌堂、二〇一五）

覚如・存覚を支えた門弟達（龍 口）

〈キーワード〉

初期本願寺教団、覚如、存覚、乗専、従覚

（東方学院講師）